

日本橋 品川 川崎 神奈川 保土ヶ谷 戸塚 藤沢 平塚 大磯 小田原 箱根 三島 沼津 原 吉原 蒲原 由比 興津 江尻 府中

第18回 勝海舟フォーラム 2024

東京 静岡 行ったり来たり

明治初年の勝海舟と人材周旋

「海の日」は「海舟の日」!

勝海舟顕彰会は今年も7月15日の「海の日」に

「勝海舟フォーラム2024」を開催します。

勝海舟の玄孫である高山みな子氏の基調講演に加え、

特別講演には樋口雄彦氏をお迎えして、

明治初年の東京・静岡における勝海舟のお話を伺います。

特別講演

国立歴史民俗博物館・
総合研究大学院大学教授

樋口雄彦氏

基調講演

勝海舟玄孫
ライター

高山みな子氏



東京都墨田区の勝海舟像

静岡県島田市の勝海舟像

2024年7月15日(祝日) 9:30~ (開場9:00)

参加無料 申込み不要 先着順 【会場】すみだリバーサイドホール

【主催】勝海舟顕彰会 【後援】墨田区・一般社団法人 墨田区観光協会・東京向島ロータリークラブ

東京 静岡 行ったり来たり

～明治初年の勝海舟と人材周旋～

明治初年、静岡藩時代の勝海舟は、東京と静岡の間を頻繁に往復しつつ、藩内外の「人のやりくり」に意を注いだ。具体的には、他藩への「御貸人」としての静岡藩士の派遣、静岡藩での修学を希望する他藩士の受け入れ、静岡藩の洋学者などに入門を希望する他藩士の紹介、人材を求める明治政府への静岡藩士の斡旋、海外留学を希望する藩内外の有志への協力、外国人教師の静岡藩への招聘、といったことである。

国立歴史民俗博物館・
総合研究大学院大学教授

樋口雄彦氏



1961年静岡県熱海市生まれ。静岡大学人文学部卒業。沼津市明治史料館学芸員を経て、現在は国立歴史民俗博物館・総合研究大学院大学教授。博士(文学、大阪大学)。著書に『明治の旧幕臣とその信仰』(思文閣出版)、『幕末維新期の洋学と幕臣』(岩田書院)、『人をおくる 勝海舟と江戸東京』(吉川弘文館)、『旧幕臣の明治維新』(吉川弘文館)、『沼津兵学校の研究』(吉川弘文館)など多数。

基調講演 勝海舟玄孫 ライター 高山みな子氏



慶應義塾大学文学部卒業。会社勤務を経て旅行・紀行雑誌、企業広報誌などの執筆活動をしつつ、勝海舟子孫として講演や各種イベントに参加。高知県観光特使、長崎市観光大使、三重県松阪市ブランド大使、東京都港区観光大使を務める。共著に『勝海舟関係写真集』(出版舎 風狂童子)、『日本全国ユニーク個人美術館』『日本全国ユニーク個人文学館・記念館』(新人物往来社) など多数。

海舟フォーラムとは

平成15年7月21日(海の日)、勝海舟生誕180年を記念し「勝海舟の銅像を建てる会」、現「勝海舟を顕彰する会」より生誕の地である墨田区に勝海舟の銅像が寄贈されました。毎年7月の海の日(祝日)に墨田区役所2階の「すみだリバーサイドホール」で勝海舟フォーラムが開かれています。



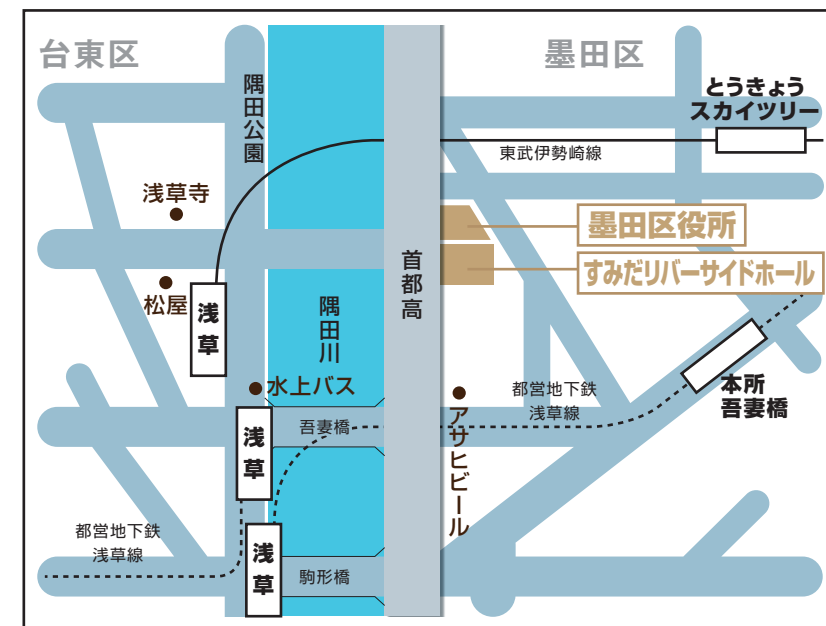
参加無料・申込み不要・先着順
どなたでもご参加できます!!

※定員700名先着順となります。(入場制限あり)

2024年7月15日(祝日・海の日)

PROGRAM プログラム

- 08:45 献花式(勝海舟銅像前) ※献花は関係者のみ
- 09:00 開場
- 09:30 開会
- 10:00 基調講演 高山みな子氏(勝海舟玄孫)
- 10:20 特別講演 樋口雄彦氏
『東京・静岡 行ったり来たり』
～明治初年の勝海舟と人材周旋～
- 11:30 閉会



【会場】すみだリバーサイドホール 東京都墨田区吾妻橋1丁目23-20

東武伊勢崎線「浅草駅」正面口から約5分／東京メトロ銀座線「浅草駅」5出口から約5分
都営地下鉄浅草線「浅草駅」A5出口から約5分／都営地下鉄浅草線「本所吾妻橋駅」A3出口から約5分
最寄のバス停は「墨田区役所」「本所吾妻橋」「リバーピア吾妻橋」

【主催】勝海舟顕彰会 【後援】墨田区／一般社団法人 墨田区観光協会／東京向島ロータリークラブ

【協力】公益社団法人 東京青年会議所 墨田区委員会／日本大学校友会東京都第六支部／向島消防少年団 【デザイン】サンピース・グラフィックス 【作成】三澤敏博
【写真出典】『駿府名勝一覽之圖』(国会図書館)／『赤坂絵図』(国会図書館)／『勝海舟肖像』(万延元年進米使節図録)／『Tokaido』(J・ボール・グティ美術館)

【お問合せ】実行委員会 E-mail▷ kaisyuforum@gmail.com

駿府の勝海舟

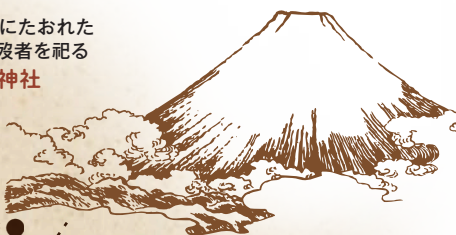
関連史跡MAP

【作成】三澤敏博

江戸城無血開城の後、海舟が徳川宗家の知行地となった駿府へ移ったのは明治元年十月のことです。

ところが海舟は政府より度々、東京へ呼び出されました。東京への往復は陸路で、東海道を歩き来したようです。その往復は次の通り。

明治元年十月十二日 駿府着
明治元年十月十一日 東京着
明治元年十月二十八日 駿府帰着
明治元年十二月五日 東京着
明治二年四月十七日 駿府帰着
明治二年六月二十日 東京着
明治三年六月三日 駿府帰着
明治四年九月三日 東京着
明治五年三月三日 駿府帰着
十二月二十九日 駿府発
そして五月二十三日、赤坂に屋敷を購入し、以後海舟は東京に永住しました。実際に出張が多く、駿府での生活はわずかなものでしたが、駿府城を中心に関東に遺る海舟の



家康の側室・お万の方ゆかりの寺には、海舟の母や妹が眠る

A 蓮永寺 静岡市葵区沓谷2-7-1

海舟の母・信子は明治三年三月二十五日に病没し、翌年二月、夫・小吉の法名を刻んだ墓石が蓮永寺に建立されました。海舟は自身とともに駿府へ移った母のため、葵区門屋に隠居所(建物は宝寿院に移築され現存)を建てましたが、そこへ移る前に信子は亡くなってしまいました。この墓には明治四十一年一月三日に亡くなった海舟の妹・順も眠っています。蓮永寺は海舟により、静岡学問所の教授クラークの宿舎となった寺としても知られます。



海舟らが通ったという老舗店に伝わる江戸蕎麦

B 安田屋本店 静岡市葵区横内町53-1

慶応二年に創業された駿府の老舗蕎麦屋。当時、駿府の蕎麦やうどんは関西風の汁で食べられていましたが、維新後に多くの旧幕臣が移住してきたため、同店の蕎麦も江戸風の味に改められたといひます。海舟をはじめ山岡鉄舟や高橋泥舟らが足を運び、慶喜も晶屑にしたそうで、かつては慶喜の筆による「お品書き」もあったのだとか。「ひしお」を使用した創業当時のつゆも再現されており、海舟が味わったであろう老舗の味を追体験することができます。



海舟や鉄舟、辰五郎らが愛したという銘酒『忠正』

静岡で古くから親しまれている銘酒に「忠正」があります。宝暦元年創業の吉屋酒造が醸造した酒で、駿府に移った勝海舟や山岡鉄舟、新門辰五郎らが愛飲したと伝わります。吉屋酒造は平成二十二年に廃業しましたが、駿河酒造場が『忠正』を引き継ぎ、現在にその歴史と味を伝え続けています。



その他、県内の主な海舟史跡



久能山東照宮

静岡市駿河区根古屋390

家康を祀る東照宮。唐門下の白梅は実割梅といい、かつて家康が駿府城で育てたものです。維新後も、この梅の由来を後世に伝えるべく、海舟と深く交流した祠官の出島竹齋は当地に実割梅を移植しました。これに感銘を受けた海舟と鉄舟が共同で建てた石碑が建立されています。



蓬萊橋の勝海舟像

島田市南2丁目

駿府に移った旧幕臣たちは、牧之原台地を開墾し、茶の栽培に尽力して、現在に続く静岡茶の礎を築きました。島田宿と牧之原台地をつなぐ蓬萊橋もその過程で架けられた橋です。海舟は彼らの開墾事業を物心両面で支え、現在、牧之原茶園を望む蓬萊橋ほとりに銅像が建立されています。



勝海舟屋敷跡

静岡市葵区門屋

明治三年、海舟は安倍郡門屋村の名主・白鳥惣左衛門が所有する梅園の一角を購入し、母・信子のための隠居所を建立しました。信子はここに入居する前に亡くなりましたが、海舟も要人らと屋敷に足を運んだようです。現在、当地には史跡を示す碑が建ち(右)、建物は宝寿院に移築(左)されています。



E 静岡学問所之碑

静岡市葵区駿府城公園1

駿府藩が設置した学問所。旧幕府の学者たちにより国内最高水準の教育がなされました。教師として招かれたクラークは海舟と深い交流を結んでいます。



D 駿府城址

静岡市葵区駿府城公園1

将軍職を退いた家康の居城。維新後、駿河府中藩主として府中入りした徳川家達の城となりました。家達は当初、城内の元城代屋敷に住んでいました。



C 西郷・山岡会見の碑

静岡市葵区御幸町3-21

海舟の手紙を携えた山岡鉄舟が、西郷隆盛と会談した場所に建つ碑。この会談における条件交渉が、後の海舟・西郷の無血開城につながりました。



H 浮月楼

静岡市葵区紺屋町11-1

謹慎を解かれた慶喜が元代官屋敷を改修し、約二十年住んだ屋敷跡。小川治兵衛による日本庭園が美しく、現在は料亭「浮月楼」となっています。



G 宝台院

静岡市葵区常磐町2-13-2

徳川家康の側室・西郷の局の墓所で、駿府における徳川家菩提寺。水戸を経て駿府に移った慶喜はここで約1年間、謹慎生活を送りました。



F 常光寺

静岡市葵区常磐町2-4-3

慶喜を警護すべく駿府へ移った新門辰五郎が宿とした寺。境内には辰五郎の妻と、戊辰の戦いで倒れた輩下の墓が建立されています。

維新後、駿府に移った徳川家と海舟

鳥羽伏見の戦いに敗れ、謹慎生活に入った徳川慶喜は江戸城無血開城後、水戸を経て慶応四年の七月二十三日に駿府 **宝台院**に移り謹慎を続けました。

海舟も同年十月十二日に駿府に移り、早速慶喜に拝謁して、これまでの報告を行っています。

翌日は駿府城に登城して、藩主となった徳川家達に今後の方針などについて話し合いました。

海舟とその家族が居を構えたのは、城から近い **鷹匠町**の二丁目四十一番屋敷でした。恭順を貫き、城明け渡しに導いた海舟の立場は複雑で、時に屋敷門に「売国奸臣」などと落書きされることもありました。

海舟らの尽力により、明治二年九月に謹慎が解かれた慶喜は翌月、紺屋町の元代官屋敷に移りました。この屋敷跡が現在の料亭 **浮月楼**で慶喜が造らせた美しい庭園が残されています。海舟も度々、この屋敷を訪ねては、東京の状況など諸々の報告を行っています。

海舟の静岡滞在は短い期間でしたが、その間に行われた数々の奔走は、決して小さなものではありませんでした。

職を失った旧幕臣の世話などにも尽力し、中条金之助らが進める茶畑の開拓には、物心ともに強く後押しをしました。現在、**牧之原**を中心に静岡県内に広がる美しい茶畑には、海舟たち旧幕臣らの想いが息づいています。

また人材養成のために **静岡学問所**が設置されると、海舟はここに米人教師クラークを招きました。学問所は廃藩置県によってわずか四年で廃校になりますが、旧幕府の優れた学者たちにより、まさに国内最高水準の教育がなされたのでした。